

「夏の歯型」

—2 稿—

2025/5/6

雨森 れに

〈人物表〉

北岡 一輝 かずき

(26) スイカ農家

高田 彩音 あやね

(26) 一輝の恋人

北岡 大和 やまと

(50) 一輝の父親

1. 畑（昼）

大きな実が転がるスイカ畑。
夏の青空が広がっている。

スイカを振り上げ、落とす高田彩音（26）。
割れたスイカを拾い、口元に持っていく。
赤い果肉に彩音の白い歯が近づく。
かじりつくと同時に、果汁が滴る。
同時に、うなじを押さえる北岡一輝（26）。
痛みに耐えられないいうように、崩れ落ちていく。
彩音、一輝目掛けてスイカを振り上げる。
悲しそうな顔で、
彩音 「好きだから、いいよね」
一輝 「（痛みに耐えながら）なんでだよ……」
暗転。アラームの音が響く。

2. 北岡家・一輝の部屋（朝）

ゲームや漫画が整頓されている和室。薄暗く、朝の予感が漂っている。

一輝がアラームを止め、上体を起こす。
気怠そうに額を押さえ、ため息。
隣にあるローテーブルを見る。
皿が2枚、スイカを食べた残骸が乗っている。
一輝は面白くなさそうに頭を掻く。
うなじに、歯型の赤痣がある。

3. 北岡家・台所（朝）

古いタイプの台所。小窓が換気のために半分ほど開けられている。
一輝が三角コーナーにスイカの残骸を捨てる。
視線を窓の外に向ける。
そこには青々としたスイカ畑が広がっている。

4. 畑（朝）

一輝と北岡大和（50）がそれぞれ作業をしている。

一輝は傷んだ葉を摘みつつ、几帳面にスイカの角度を変えている。

汗が目に入り、痛そうな表情をする。

首にかけていたタオルを取り、髪をわしわしと拭く。

一輝のうなじに気付く大和。にやにやとしながら一輝に近づく。

大和 「元気ねえな」

一輝 「ただの寝不足」

大和 「ふーん。あーちゃん、激しかったんか」

一輝、驚いた顔。

大和は自分のうなじを指で叩いて見せる。

一輝は理解したようにタオルを首に戻す。

大和 「嫁と孫、いっぺんに来てもいいなあ」

一輝 「（思わず立ち上がる）そういう言い方やめろって」

大和が楽しそうに去っていく。

一輝は不満そうな顔をしつつも、作業に戻る。

5.

農業用倉庫・外（昼）

休憩所かわりに使っている大きい倉庫。中では大和と従業員が談笑している。

日陰にあるベンチで、一輝が弁当を食べている。

一輝の目の前にはスイカ畑が広がっている。

背後から、凍らせたペットボトルが当てられる。

ふりむくと彩音が微笑んでいる。

彩音 「昨日はごめんね」

一輝 「謝るぐらいならしなきゃいいのに」

彩音が、和樹の隣に座る。

彩音 「あんだけ怒られたら帰るしかないんだけどね」

一輝 「え。お前、なんに対して謝ってんの？」

彩音 「途中だったのに帰ったこと」

一輝 「違うって。俺の事噛んだことは？」

彩音 「噛んだね。いつもよりガブっと」

一輝 「謝らないわけ？」

彩音、少し考えて、

彩音 「痛かったなら、ごめん」

一輝 「なんだよ、それ」

彩音 「またやめろって言うんでしょ？ でも無理。好きなものは口に入りたいもん」

彩音が煙草に火をつける。

一輝 「それも？」

彩音 「これはちよつと違う」

一輝 「わっかんねえ。興奮すんの？」

彩音 「興奮じゃないんだよなあ。なんていうか——満足？」

彩音がTシャツの胸元をばたつかせる。

手の動きに合わせて、肌と下着がチラチラと見える。

一輝の喉が上下する。

彩音 「心が満たされるっていうか——」

彩音、一輝の様子に気付き、胸元を大きく開ける。

彩音 「昨日も見たくせに」

一輝 「（目をそらし）見てねえよ！」

彩音は胸元を戻して、笑う。

彩音 「見てない、はないでしょ」

彩音が面白そうに笑い、煙草を吸う。

一輝は彩音の様子を見て、

一輝 「謝りにきてないだろ、お前」

諦めたように弁当を食べ始める。

ふたりは強い日差しを受ける畑を、ただ見ている。

倉庫の中から、大和の大きな笑い声がする。

彩音、ふつと笑い、煙草を消す。

彩音 「おじさん、変わらないね」

一輝 「デリカシーがなくて困ってんの」

彩音 「子供できたら、お乳あげるの見せろって言いそう」

一輝 「（咳き込む）なんでそんな話になんだよ」

彩音 「一輝が噛むの許してくれたらなー。すぐ嫁に行くのになー。そしたら子供もすぐなのになー」

一輝が目を見開く。

彩音は立ち上がって伸びをする。

一輝は彩音の体つきから目が離せない。

彩音 「好きだとぎゅってしたくなんない？」

一輝、彩音を後ろから抱きしめる。

一輝 「なる」

彩音 「んで、私は噛みたいってなる」

彩音が和樹の腕を甘噛みする。

一輝 「わっかんねえなあ」

一輝が彩音の首筋を噛む。

彩音 「痛っ」

一輝 「ほら痛いじゃん。なんで好きな奴、痛めつけんだよ」

彩音 「……ごめん」

一輝 「なんか怖いんだよ。噛んで、その次はって考えると」

彩音 「え？」

一輝 「人の味を覚えたクマとか、聞くじゃん」

彩音、驚いて、一輝に向き直る。

彩音 「まって。私、食べたいなんて言ってるじゃない」

一輝 「じゃあなんで噛むんだよ」

彩音 「好きだから」

彩音が一輝を強く抱きしめる。力が入りすぎて体がこわばっている。

彩音 「これと一緒に。力いっぱいぎゅつとしたいのと、ガブっと噛みたいのは同じなの。わかってよ」

一輝は苦しそうな顔をし、ふりほどこうとする。

しかし、懸命に伝えようとする彩音の様子に抵抗をやめる。

一輝 「(苦しそうに) いたい」

彩音が離れる。

一輝は彩音から距離を取り、深く息をはく。

彩音 「ごめん、強くしすぎた？」

泣きそうな彩音。

一輝はため息をつき、無言で彩音を見つめる。

彩音、沈黙に耐えきれず下を向く。

一輝 「愛情表現なら。悲しそうな顔、すんなよ」

彩音は思わず顔をあげる。

一輝が彩音の頭に手を置く。

一輝 「殺したいわけじゃないってのはわかったから」

彩音 「冗談きついよ。痛いときはやめるつもりあるし」

一輝が彩音の頭をぐしゃりと撫でる。

一輝 「なら最初から加減しろって。でも、よかった」

彩音 「なにが」

一輝 「彩音が女王様か食人鬼かで悩んだ」

彩音 「なにそれ。ほんと、昔から大げさ。心配性」

彩音が一輝を小突く。

大和 「あーちゃん、来てたんか」

倉庫から大和が出てくる。手にはスイカとビニールシートを持っている。

彩音 「仕事休みだからきちゃった」

大和 「カズは幸せもんだよなあ。ほら、スイカ食ってけ」

彩音 「あ、それ私やる」

彩音がスイカを受け取る。

大和は地面にシートを敷く。

彩音がおおきく振りかぶってスイカを落とす。

シートの上で飛散するスイカ。

大和が嬉しそうな顔をして、ひじで一輝をつつく。

大和 「この食い方できたら完全にスイカ農家の嫁だよ。なあ？」

一輝 「そういうのいいから」

大和 「へえへえ。俺、塩取ってくっから」

大和が倉庫へ行く。

彩音はスイカにかじりつき、頬を緩めている。

彩音 「（一輝にスイカを差し出して）めっちゃ甘い」

一輝、受け取って、かじりつく。

一輝 「あのさ、（倉庫のほうを目くばせして）あんな親父いるけどさ。嫁、くる？」

彩音 「いいけど？」

彩音が歯型のついたスイカをみせつける。

一輝、困ったような笑顔で額を押さえる。

おわり